

ローイング（旧ボート競技）における国際比較研究
ーメダル獲得国の組織体制と強化に着目してー

スポーツ科学専攻 スポーツクラブマネジメントコース

5023A309-7 坂上 熙英

研究指導教員：間野 義之 教授

1. 緒言

近年、国際的な名声や国民のスポーツへの関心・活力の創出に寄与することから国際競技大会において好成績を収めることは多くの国にとって重要なものとなっている。

日本のローイングのオリンピックでの最高位はシドニー・アテネ大会の6位、以降の最高位は9位と厳しい結果が続いていることから、日本のローイングにおける国際競技力向上に向けた研究を行う。

2. 先行研究の検討

国際的なスポーツの成功要因を特定し、測定する研究は、各国の社会的・文化的側面に焦点を当てるマクロレベルの研究、スポーツ政策や戦略に焦点を当てるメゾレベルの研究、個々のアスリートの個人的要因及び周辺環境に焦点を当てたミクロレベルの研究の3つに分類される。その中で社会的な影響を受けて変化し得るメゾレベルの研究は必要性の高さが指摘されるものの、メゾレベルに着目した先行研究は乏しい。

3. 目的

本研究は、日本のローイング強化におけるメゾレベルの要因に着目し、ローイングにおいてオリンピックでメダルを獲得した経験のある国と、これまでメダルを獲得していない日本とのシステム上の違いを明らかにし、ボート競技のさらなる発展と競技力向上に役立てることを目的としている。

4. 調査方法と調査内容

4-1. 半構造化面接調査

ローイングのオリンピックでメダル獲得経験がある強豪国の3カ国（カナダ、アイルランド、クロアチア）と日本の協会関係者に対してオンラインで半構造化面接を実施した。

4-2. 質問票による質問調査

ローイングのオリンピックでメダル獲得経験のある強豪国の2カ国（アメリカ、中国）の協会関係者に対して質問票での調査を実施した。

4-3. 調査内容

先行研究（De Bosscher et al., 2006）で競技パフォーマンスの向上に影響を与える要因としてあげられた選手のサポート体制、トレーニング施設、トレーニングと試合の機会、指導者の質の4つを調査項目として設定した。

5. 結果

5-1. 選手のサポート体制

日本と比較して強豪国はフルタイムのコーチ・スタッフの人数が多い。調査したすべての強豪国において理学療法士をフルタイムで雇用している。

5-2. トレーニング施設

日本も含むすべての国が2000mレーンを複数有し、トレーニングセンターが併設もしくは近隣にある。日本の強化拠点についても、ジムは練習水域と併設であり、宿泊施設に関しても徒歩5分圏内にあることから強化キャンプ時は環境要因については各国と水準は変わらなかった。

5-3. トレーニングと試合の機会

年間のメインレース(オリンピック及び世界選手権)に向かうローテーションに関しては、日本・アメリカ・カナダ・アイルランドはレース数において同じ傾向にあった。

国際大会の多くがヨーロッパで開催されるため日本・アメリカ・カナダは移動距離やコストの問題で国際大会への出場機会に限られる。ヨーロッパではあるものの、アイルランドの場合にも大きなコストがかかるため国際大会への出場機会に限られる。その点を補うため国内のトライアルレースや国内大会での競争を重要視している。また、週間のトレーニングボリュームや時間、セッション数については日本と強豪国で差がないことが確認できた。

5-4. 指導者の質

指導者に関しては、それぞれの国でライセンス制度や研修制度を有しており、ナショナルチームのコーチはそれぞれの NF が人選することとなっている。自国のクラブチームや出身国などで実績を積み上げて選ばれることが多い。

6. 考察

6-1. 選手のサポート体制

日本にも各種目カテゴリを充足する4名以上のフルタイムのローイングコーチが必要であり、協会の雇用を増やすことが難しければ代表選手の実業団チームからのサポートが有効であると考え。日本ではスポーツに特化した理学療法士は現状少なく、すべての強豪国において理学療法士が付いていることについては日本と海外での資格制度の違いが伺える。

6-2. トレーニング施設

水域・ジムについては併設されておりトレーニング環境は整っている。すべての代表選手が強化拠点付近に住居を持つことで強化合宿同様の状態を保つことができ、ナショナルコーチに

よる継続したコーチングも行うことが出来る。

しかし、日本特有の実業団選手中心という環境において、海外と同じような環境づくりを推進することは難しいといえる。

6-3. トレーニングと試合の機会

国際レガッタへ出場して国際競争の経験を積むことは競技力向上に必要不可欠であるが、費用面の問題から日本は出場数に限られる。そのことから、国内での競争力を高めることは極めて重要で国内大会やトライアルレースでの競争力を国際レベルに引き上げることが肝要といえる。

6-4. 指導者の質

コーチカンファレンスを実施することで現在の日本の指導者の質を高め、指導者ライセンスについても国際基準の資格保持者を増やす必要があると考える。

6-5. 考察のまとめ

トレーニングボリュームやセッション数については日本も強豪国と大きな差がないことが確認できた。トレーニングボリュームに大きな差がないのであれば指導者の質を高め、トレーニングの効率やプログラムの確実な実施が肝要と考える。

7. 結論

本研究では4つの要素での比較分析から日本と強豪国での違いがいくつか明らかになった。結果から導き出された日本代表チームに不足している要因と国際競技力向上に関する要因の各国との違いを、日本の文化・社会的背景を踏まえてシステムを整理していくことが求められる。その中でメゾレベルの要因以外でも選手の体力値やトレーニング内容等のミクロレベルの要因にも目を向ける必要がある。